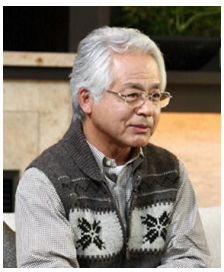
●春日部市民文化講座（第２回）

◆日　　時：2012 年 9 月 26 日(水) 10 時（ぽぽら春日部 6 階会議室）～11 時

◆テ ー マ：講演「漆の話」

講師：増村 紀一郎さん（髹漆作家（人間国宝））

◆ゲスト紹介：1941 年 12 月 1 日、漆芸家の父、益城(ましき)氏の長男として東京都豊島区に生まれる。東京藝術大学大学院を修了し、1997 年東京藝術大学美術部教授へ就任するとともに、 正倉院宝物「御袈裟箱(おんけさのはこ)第一号」を復元する。2002 年には紫綬褒章を受章し、2008 年に「きゅう漆」の分野で親子 2 代にわたり、重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定される。春日部市に 20 数年在住し、きゅう漆はもちろん、市の芸術文化の振興に多大なる尽力をしている。2008 年 10 月 1 日に春日部市市民栄誉賞を受賞。現在：重要無形文化財保持者（人間国宝）／東京藝術大学名誉教授／埼玉県春日部市親善大使。



■誕生、そして「紀一郎」という名

私は増村紀一郎と申します。父と母は熊本県益城町（ましきまち、熊本市の東隣）の出身、父の益城（本名・成雄）は明治 43 年(1910 年)の生まれで、父の兄の末雄と母の姉のみやが結婚しており、二人の紹介で父と母が見合いをして結婚し、私が昭和 16 年 12 月 1 日に生まれたのです。私の生まれた前年、昭和 15 年は紀元 2600 年という日本にとっては紀元節という記念の年であり、翌 16 年は 2601 年紀元節の翌年の子ということで「紀一郎」と命名されたそうで、気に入っている名前です。

■父・増村益城

私が漆の仕事を始めたきっかけを話すためには、父の話をしなければなりません。父の実家は熊本県益城町で今でもたばこ栽培の農家を営んでおります。父は熊本市立商工学校に漆工科があり、そこで漆の技術を学び、昭和 5 年に職人として奈良の名人・辻富太郎氏に弟子入りします。当時、奈良で日展が行われ、そこで東京美術学校を出て、熊本県の先輩・高野松山（しょうざん）の作品に出会い、職人ではなく作家を目指そうと考えました。当時の日本では外貨獲得のために焼き物、金工、漆工、染め物、七宝などが輸出品として奨励されました。明治政府は官立で工芸品技術を高めるために、東京美術学校を創設します。江戸時代の職業ランキングの中で、1 位が大工、2 位が浮世絵絵師、3 から 5 位は忘れましたが、6 位が蒔絵師、7 位が塗り師でした。

■父の仕事を手伝って

私が父の仕事を継ごうと思ったのは、「楽をして一生暮らそう」と考えたからですが、東京に出てきた父は代官山にある山田平安堂の職人として仕事をしていましたが、日展等に作品を出すために 3 ヶ月近く職人の仕事を辞めてしまうのです。我が家は信濃町にありました。中学生になると父は塗りを行い、母と私が塗った漆を研いだり磨いたりして作品を完成させていました。そうしたこともあり、東京藝術大学を目指し、3 浪して藝大に入りました。

■漆の事

漆は木に傷を付けて採るものです。漆の種類には大きく 2 つあります。**生漆（きうるし）**というのは、漆の木から採取した原液です。生地にすり込んで使ったり、砥の粉等を混ぜて下地を作ります。もう一つが**透き漆（すきうるし）**です。生漆には約 20%の水分がありますので、それを蒸発させて飴色の半透明な漆にします。素地の見える透明塗りや顔料を混ぜて彩漆を作ったりします。さらに鉄分を加えて化学変化させて黒漆にしたり、赤漆にしたりしていきます。

■木曽平沢での漆産業との出会いが

大学時代は山登りを楽しんでいました。山梨県の八ヶ岳や御嶽山を歩きました。ある時、木曽平沢地区で漆器屋を回り、そこで、自分と同じくらいの年代の職人が勢いよく仕事をしている姿と、デザインを学び山登りを楽しんでいる自分の立ち位置に目覚めました。漆を採る人、精製して漆を作る人、そしてその漆を塗る人、そういう背景が見えてきて、自分の立ち位置というものがしっかりと見えてきたのです。この人達と一緒に、自分が学んできたデザインというものを使えないかと‥。そこで、大学院を出てから、この木曽平沢の漆器組合人たち、役場の人たちの中に入って嘱託職員として働きました。木曽平沢は好景気で、私が使い勝手に対してアドバイス・注文を付けると、ちょっとした改善で通産大臣賞を取るということもありました。こうして、木曽平沢で技術指導デザインの仕事を始めました。

■私の漆工人生を貫くもの

私は、漆工制作がとても好きです。一つには、**自分で美しい器を作って見せたいという願望**があります。次に、自分が美しいと考える器を作る事ができて、**私が作ったものを人々に使ってもらえること**です。三つ目に、**より良い器で生活ができる**。美というものを夢見てきた自分があったということです。藝大では自分の背中を見せて次世代に教えています。

増村先生が歩まれてこられた人生、そして貫くもののお話ととても興味深いものでした。